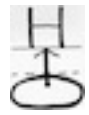


さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.5

2017

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

仏教は6世紀に日本に伝わりました。浄土真宗は親鸞聖人(1173-1263年)によって築されました。英語では“Shin-Buddhism”と呼ばれることがよくあります。このShinは浄土真宗の真で、真実を意味します。仏教は、差別や条件無く、全ての人の為であると説いています。

道を求めるころ (2)

雪山童子の求道

岡本英夫

この教えが説かれる経典は『涅槃経』です。雪山というのは〈ヒマラヤ〉のことです。お釈迦様が、「ある時私が雪山の山中で座禅を組んでいると、このようなことがあった」と説き始められるものです。お釈迦様ご自身の内面と言いますか、お釈迦様ご自身の求道心をこのような物語の形で表しているのかと思われます。

経典の言葉は少しわかりにくいかもしれませんが、文章を少し意識したものを読みながら進めてみたいと思います。(字を太くしている箇所が経典を意識したところです)

帝釈天という天人がいます。この帝釈天が別の天人から次のようなことを聞くのです。

「今地上には菩薩と呼ぶべき大変な求道者がいて、彼は人々のために自分の身を貪らず、あらゆる人々を利益し、救って行くために種々無量の苦行を行っている。たとえ山や海のように膨大な宝を見せられても、唾を見る思いで何等執着せず、財宝や、愛する妻子、邸宅や、車等を捨て、天に生まれる事をも願わず、ただ一切の人々に救いを得させたいと願っている。」

このように、ある天人が帝釈天に話すのです。これを聞いた帝釈天が次のように答えます。

「もしあなたの言う通りであれば、その人は一切世間のあらゆる衆生が持っている無量の煩惱を滅し、撰取し救おうとなさっていることになる。そのようなことは私にはとても信じ難い。



木のもとのお話(5)

親鸞 (2)

親鸞聖人もはじめは厳しい修行によって悟りを得ようとされていました。しかし親鸞聖人もある日、お釈迦様と同じように、自分自身が聖者になることはできないと理解されたのです。それからさらに経典、仏教の書物等を熱心にお読みになったりしてお勉強に励まれました。

特にインド、中国、日本における7人の僧侶から大きな影響を受けました。この親鸞聖人の深い勉強と思索、そして何よりも自ら求めて歩み、道を明らかにする姿勢から浄土真宗は築かれたのです

なぜなら、衆生というものは仮に菩提心をおこしても、ささいな縁によって動転してしまう。水に映った月は水が動けばすぐに動いてしまうようなものだ。私はこれまでこのような事例を無数に見てきた。」

ここで「菩提心」という言葉が出されます。「菩提」というのは真理、道、さとりという意味です。つまり菩提心とは、真理を求める心、道を求める心です。真実を求めて行こうという心。具体的には、自分の身を貧らず、人々の為に大いなる行いをしていくという、こういう行いが菩提心に生きている姿だということです。

帝釈天が思うのは、人が仮に一度そういう菩提心や願いをおこしても続かないのだということです。池に映った月は波がない時は真ん丸に見えますが、少しでも波が立つと、もう月は歪んでしまう。このようなものだと。だから、自分はやっていくぞと決心しても、その人の上になんかが起これば、もうその決心はぐらついてくる。これが人間なのだと。このような例を自分は山程見て来たのだと。だから、自分の煩惱を超えて歩もうとしている人がいるというのはとても信じられないと。

「煩惱」というのは、私たちの心や身体を煩わせ悩ますものです。様々ありますが、一口に言えば、極めて自己中心的な思い、自己本意な思いですね。自分の身を貪るとするのが煩惱ですから、煩惱を超えて、大変厳しい修行をして、人々のためにと歩んでいる人がいるというのは、とても信じられないと。

そこで、本当にその人がそのような歩みをしているかどうか帝釈天が試しに行ってみようということになります。

(続く)

仏教を「読む」

小松由佳

「仏教」と呼ばれている宗教には、たくさんの「派」があります。これは「教え」の解釈の違いからくるものといえる面があるでしょう。仏様のお教えは語り継がれ、弟子達の尽力により「経典」が出来上がりました。「大無量寿経」、「観無量寿経」、「阿弥陀経」...他、いくつも存在しています。これらは、真実を伝えんと、様々な表現で書かれています。それをそのまま読むと、非常に分かり難く、なにを意味しているか解釈は困難です。そこを深く深く読み、真実をいただく努力をしないと解明できません。

浄土真宗の宗祖親鸞聖人も、経典の解明に大変骨を折られました。特にインドの龍樹、天親、中国の曇鸞、道綽、善導、日本の源信、法然の深い解釈から熱心に学ばれ、さらに深く深く読みを深められました。「浄土真宗」は経典の読みの深さの髓からまとめ上げられたといえるのではないかと思います。それをいただける現代の私たちは、本当に恵まれていると、感謝の思いが胸にこみ上げる気がします。

ただ、私たちも、「教え」を正しくいただく努力をしなければなりません。親鸞聖人の死後、弟子たちの中に聖人の教えに不確かな解釈をするものが現れ、それをはっきりさせるために「歎異抄」という書物が表されました。親鸞聖人と生きる時代を共にした弟子でも、このような事態を起こしたのですから、私たちはよほどしっかり勉強しなければ、簡単に迷いの道に外れてしまうかも知れません。経典の解説が難しいことは上記致しましたが、親鸞聖人のお書きになった文章も難しく、深く良く読む努力をしなければ真実をいただくことはできません。

できれば私たちも、自身で経典や親鸞聖人の書物などを手に取り、読むことが、迷いの道へ外れない、良い方法だと思います。その際重要なのは、「深く読む」ということだと思います。書かれていることをそのまま読むのではなく、書かれていることの真髓を読み取るということです。岡本英夫先生は、経典、親鸞聖人の御文章、他、たくさんの仏教の書物など、大変深くお勉強された、素晴らしい先生です。難解な書物も先生のおかげで理解でき、勉強しようという意欲が湧くことでしょう。

